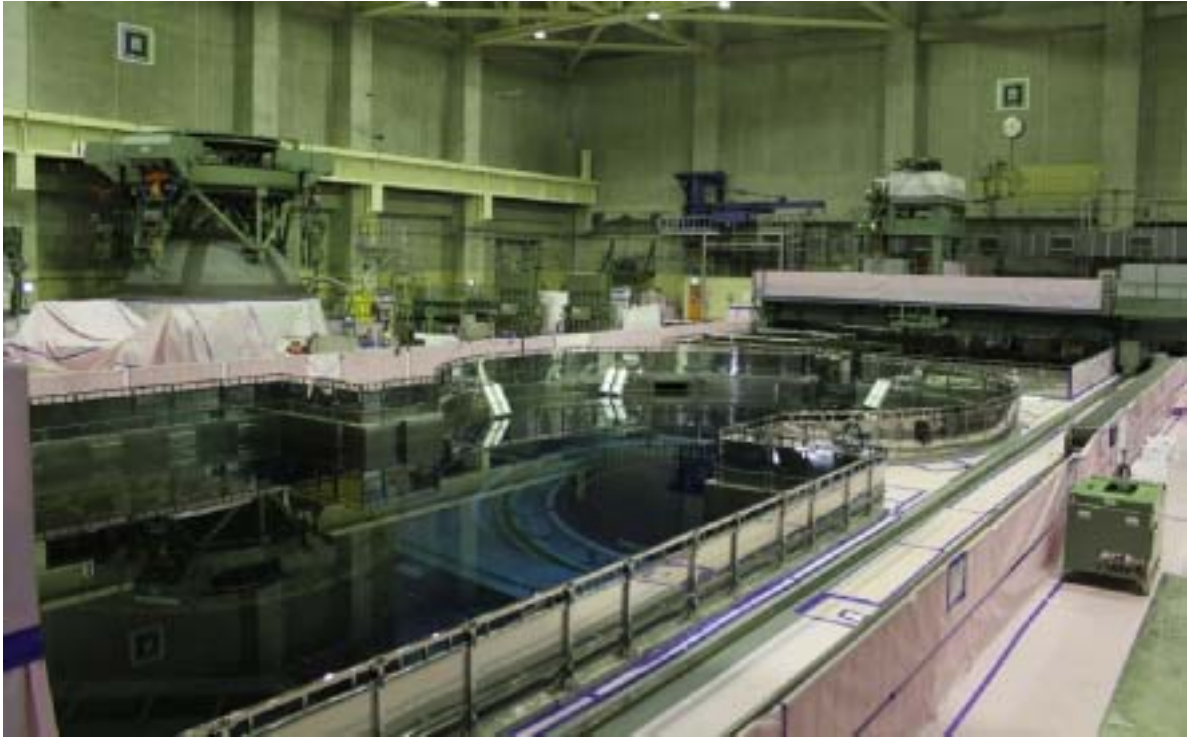


2012年10月2日 IWJ: Independent Web Journal

福島第2原子力発電所「4号機における燃料取り出し作業」の取材 【IWJ・平山】

2012年10月2日(火) 福島県双葉郡の福島第2原子力発電所で、福島第2原子力発電所「4号機における燃料取り出し作業」の取材が行われた。報道陣に対して公開されたのは、4号機における原子炉から使用済み燃料プールへの燃料棒の移動の様子。

福島第2原発は、水蒸気爆発を起こした第1原発とは異なり、津波による被害は少なかった。福島第2原発4号機は、発災から4日後の2011年3月15日には、冷温停止に至っている。今年の5月17日には、4号機における復旧計画対象設備の復旧が完了。9月21日には、4号機原子炉開放作業が完了していた。



2F - 4号機原子炉開放作業後の様子 2012年9月22日撮影 = 東電提供

そして、10月1日より、4号機の燃料移動が開始された。取材陣に公開されたのは、その移動作業の2日目にあたる。

4号機の全燃料は764体ある。1日に取り出せるのは、約70体程度だという。東電は、同月中での移動完了を目指している。

当日は、11時30分にJR広野駅に集合。東電が用意したマイクロバスで警戒区域内に入り、福島第2原発に入構した。正門および原子炉建屋外観は、核物質防護上の観点から、撮影が禁止された。

会議室で当日のスケジュール説明を受けた後、ホールボディーカウンターを受ける。取材陣の中で、異常値を出した者はいなかった。

4号機原子炉建屋に入り、C服と呼ばれるものに替える。迷路のような通路を進んだ後、4号機原子炉建屋6階のオペレーティングフロアで取材が行われた。取材陣はプールの直前にまで近づくことが許され、燃料が原子炉から使用済み燃料プールへと運ばれる様子を撮影することも許された。長さ約4.5メートルの燃料集合体を、クレーンのような機械で1本ずつ引き上げ、同じ建屋内の貯蔵プールに15メートルほど移動する。原子炉は直径6メートル、深さ20メートル。110万キロワットの電気を作ることが出来るという。

現場取材後、増田所長の記者会見が行われた。IWJからは、なぜこの時期に燃料移動作業の様子を取材陣に公開したのか、そしてそれは、近々行われる、福島第1原発のプレスオープンに関係しているのか、という点を質問。増田所長は「福島第1と第2とで連携が取れているわけではない」とし、「4号機が淡々と復旧への取り組みを行っているところをお見せしたかった」と、復旧作業が安全に進捗していることを強調した。また、今後の再稼働の予定については、「国の方針に従うしかない。また、住民の理解なくして再稼働はあり得ないと考えている」とした。

以下、配布された資料です。

平成 24 年 10 月 2 日
東京電力株式会社
福島第 2 原子力発電所

福島第 2 原子力発電所 ご取材スケジュール

日時 平成 24 年 10 月 2 日 (火)

【第 1、2 班】 11 時 15 分 ~ 15 時 40 分

【第 3 班】 11 時 50 分 ~ 15 時 40 分

内容

< 第 1、2 班 >

11 : 15 福島第 2 原子力発電所 事務本館玄関 到着

11 : 15 ~ 11 : 50 WBC、カメラ等機材養生

11 : 50 ~ 12 : 15 挨拶、概要説明、注意事項 等

12 : 15 ~ 12 : 40 現場へ移動

[第 1 班]

12 : 40 ~ 12 : 50 4 号機原子炉建屋 6 階 (燃料交換機室)

12 : 50 ~ 13 : 20 4 号機原子炉建屋 6 階 (オペレーティングフロア)

[第 2 班]

12 : 40 ~ 13 : 10 4 号機原子炉建屋 6 階 (オペレーティングフロア)

13 : 40 ~ 13 : 20 4 号機原子炉建屋 6 階 (燃料交換機室)

13 : 20 ~ 13 : 50 サーベイ (3・4 号機サービス建屋)

13 : 50 ~ 14 : 05 事務本館戻り

14 : 05 ~ 14 : 35 WBC、カメラ等機材養生外し

14 : 35 ~ 14 : 55 休憩

< 第 3 班 >

11 : 50 福島第 2 原子力発電所 事務本館玄関 到着

11 : 50 ~ 12 : 15 挨拶、概要説明、注意事項 等

12 : 15 ~ 12 : 45 WBC、カメラ等機材養生

12 : 45 ~ 12 : 55 休憩

12 : 55 ~ 13 : 20 現場へ移動

13 : 20 ~ 13 : 30 4 号機原子炉建屋 6 階 (燃料交換機室)

13 : 30 ~ 14 : 00 4 号機原子炉建屋 6 階 (オペレーティングフロア)

14 : 00 ~ 14 : 20 サーベイ (3・4 号機サービス建屋)

14 : 20 ~ 14 : 35 事務本館戻り

14 : 35 ~ 14 : 55 WBC、カメラ等機材養生外し

< 第 1、2、3 班 >

14 : 55 ~ 15 : 15 増田所長挨拶、質疑応答

15 : 15 ~ 15 : 30 [第 1、2 班] 解散 (楢葉町役場)

15 : 15 ~ 15 : 40 [第 3 班] 解散 (JR 広野駅)

以上

- ・福島第 2 原子力発電所 4 号機の燃料移動について 平成 24 年 10 月 2 日
- ・福島第 2 原子力発電所 復旧計画の進捗状況について (月報:平成 24 年 9 月)

2012年10月19、20日 アサ芸プラス

福島第2原発「燃料棒取り出し」緊迫の1日を密着ルポ「第一」のようにメルトダウンこそしなかったが、津波被害を受けた福島第2原発4号機。先頃、冷却機能が震災前の水準に戻り、10月1日より原子炉から核燃料棒を使用済み燃料プールに移す作業が始まった。翌2日に数十人の報道陣に公開された作業を取材したフリージャーナリストが体感した「緊迫の1日」。

波一つ立っていない真っ青なプールの水面。水中には車輪を横倒ししたような不思議な穴がポツカリと口を広げている。

何も知らずにその部分の拡大写真だけを見れば、高級リゾートホテルのプライベートプールかと勘違いする人もいるかもしれないと思えるほど、ある種、神秘的なまでに美しい。

しかし、このプール、原子力発電所の使用済み核燃料の保管場所なのだ。

東電福島第1原発事故による放射能汚染で、福島県沿岸部の双葉郡一帯に「警戒区域」という名の無人地帯が出現してすでに約1年半。区域内には福島第1原発の南12キロに東電が運営するもう1つの原発・福島第2原発が双葉郡富岡町と楢葉町にまたがって位置する。私が目にした使用済み燃料プールは、まさにこの第2原発のものだった。

東電福島第2原発は昨年3月11日の東日本大震災で、第1原発と同様に津波に襲われた。来襲した9メートルの津波は原発敷地の南側にある1号機近くから4号機周辺まで流れ込み、建屋周辺は約50センチ浸水。海側にあった海水ポンプの機能が奪われ、4基中3基の原子炉冷却が一時不能になった。

しかし、第1原発と違って第2原発では外部からの高圧送電線が1回線生き残ったことで、何とか4日後の3月15日までに全号機で冷温停止にこぎつけ、事なきを得た。

もっとも第2原発でも津波被害は甚大で、冷温停止中とはいえ、現在も一部は仮設設備で運営されている。その復旧作業の一端を今回、東電が公開したのである。

福島県双葉郡広野町のJR常磐線広野駅から東電が用意したマイクロバスに乗り込み、国道6号線を北上して約10分。前方に「止まれ」の旗を振る警察官数人が立つ様子が見える。楢葉町と富岡町の境界、現在の警戒区域の検問所である。

ここを越えて、間もなくバスは6号線から太平洋側に見える森へ右折。沿道に駐車した警察車両の前を通り過ぎると、民間警備会社の警備員が立ち並ぶゲートに到着した。福島第2原発正門前である。

原発という非常にデリケートな場所であるためか雰囲気はものものしいが、実質的に1時間にも満たない原発取材のために構内に入ってから要したさまざまな手続きに比べれば、それも大したものではなかった。

第2原発事務本館に到着後、私は養生を行う職員に撮影機材を渡し、ホールボディーカウンター(WBC)による内部被曝量の計測を行った。

第1原発事故以後、東日本全土に放射性物質が降り注いだと言われる中で、自分の体内がどれほど放射能に侵されているかは気になるところだ。

小さなブースに据え付けられた椅子の背もたれに密着して着席。背もたれに埋め込まれた装置が数値を計測するという。目の前の壁に埋め込まれた大画面には走る列車の運転席にいるような映像が流れ、右隅に残りの計測秒数が表示される。

待つこと1分、画面に正常値との旨が表示された。少しホッとする。その後、養生の済んだ機材を持ち、敷地南側から順に1号機から4号機まで立ち並ぶ建屋エリアまで移動すると、ガラス張りの建物前でバスを降りる。建物内で金属探知機検査を受け、2重扉のセキュリティゲートに到着する。

そこで東電側から渡されたカードをかざして2つの扉を開け、出口へ。そこから再びバスで今回公開された4号機建屋前まで行き、建屋1階で再び2重扉を通過する。

目の前は更衣スペース。我々はパンツ1枚になり、備え付けの「TEPCO」マーク入りのスウェット上下、靴下、綿手袋を着用する。靴下はズボンの裾を覆い込むように履かねばならない。

これで終わりかと思いきや、さらに建屋内で最も放射線物質付着の可能性が高いエリアに入るために必要なC装備と呼ばれる赤のカバーオール、新たな靴下とゴム手袋を重ね、赤のゴム靴とヘルメットも付けてようやく装備が完了する。その姿はまるでウルトラマンだ。

この格好で原子炉棟に入る2重扉の前に移動する。扉が開くとなぜかスイス民謡の「静かな湖畔」のメロディが大音量で流れる。最深部入り口が開いている警報の意味だという。

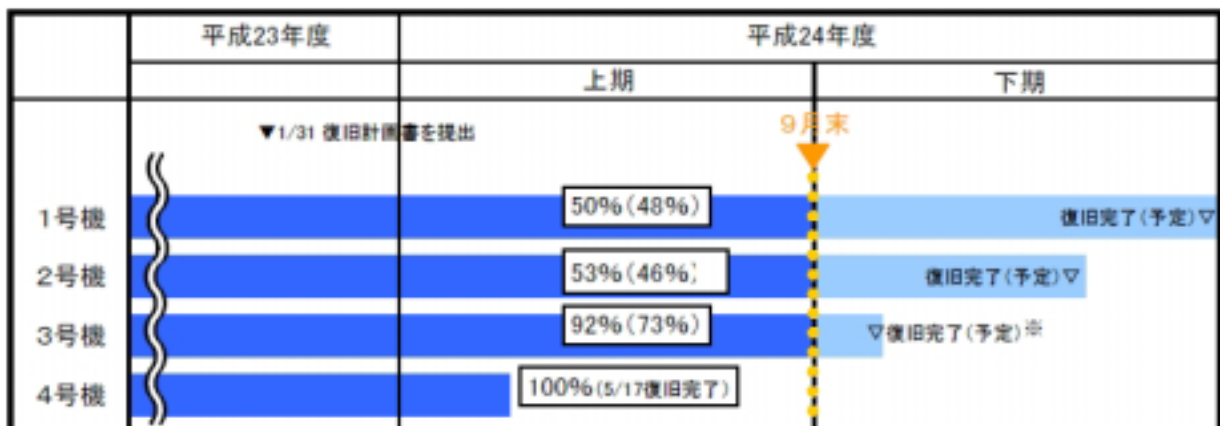
これを越え、エレベーターで6階オペレーティングフロアに到着。ようやく冒頭の使用済み燃料プールの光景を目にしたのだ。公開された復旧作業とは、震災当時、原子炉圧力容器内にあった燃料集合体全764本を取り出して使用済み燃料プールに移動するというもの。現在、第2原発は稼働停止中であるため、燃料棒を使用済み燃料プール1カ所で集中して冷却、管理を簡素化する措置だという。

前述した車輪を横倒ししたような穴は原子炉圧力容器内に通じる場所で、燃料取替機という機械で圧力容器内から燃料棒をつまみ上げ、水の中をそのまま使用済み燃料プールに移動させ、そこにあるラックに燃料棒を差し込む。

この作業を行うため、燃料取替機は燃料プール脇の柵のすぐそばに沿ってゆっくりと移動する。報道陣がその様子を撮影しようとプール脇に近づくと、案内役の東電社員から「危ないです」との大声が飛ぶとともに、トラックがバックする時のようなピーピーという警報音。一瞬、放射能漏れかとドキッとしたが、取替機との接触事故の危険を知らせていたのだ。綿手袋とゴム手袋を重ねて着用していることもあってか、カメラを持つ手のひらに汗がにじんでくるのがわかる。

結局、手間ひまの煩雑さとは対照的に、最深部の公開はわずか20分で終了した。

もっとも燃料棒の移動ができる4号機は、第2原発でも状態が最も良好で、被害が大きかった1、2号機のこの9月末の復旧状況は最終目標の50%程度。まだ半分は仮設備で運用されているのだ。一見、何事もないかのように記憶の奥底に追いやられている東電福島第2原発。ここでも事故はまだ完全収束とは言えないのである。



表中の%は復旧計画に基づく復旧作業の平成24年9月末時点の進捗割合。()内の%は前月末時点の同割合